

利根川河口域における海難者供養の習俗

——千葉県銚子市・茨城県神栖市波崎町の立正佼成会の事例から——

小 野 寺 佑 紀

ONODERA Yuki

非文字資料研究センター 2018 年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】立正佼成会は、昭和 13（1938）年に霊友会から独立した庭野日敬、長沼妙佼によって創設された新宗教である。『宗教年鑑』（平成 30 年度版）によると、会員数は約 260 万人で、国内に 605 か所の教会や布教所がある。新宗教では幸福の科学や創価学会に次ぐ信者数（公称）を持ち、霊友会系諸教団の中においては最大規模の宗教団体である。

千葉県銚子市と対岸に位置する茨城県神栖市波崎（旧波崎町）では、立正佼成会による「水難供養」が毎月定期的に行われている。

当該地域は利根川河口域に位置しており、国内随一の年間水揚量を誇る漁業基地として知られる。江戸後期には東廻り海運の要衝として大いに発展した。一方で、鹿島灘に面した銚子沖は海難の難所として知られ、「阿波の鳴門か銚子の川口、伊良湖の渡合が恐ろしや」という俚諺も伝わり、日本三大海難所の一つとして恐れられていた。

古くから海運業や漁業で繁栄した利根川河口域周辺は、悲惨な海難事故によって翻弄されてきた歴史を持っており、海難者の供養にまつわる様々な習俗がみられる。

その背景には、河川港特有の海難にまつわる歴史や漁業従事者が多い地域性など、海辺に依拠したさまざまな要因がみられる。

また、佼成会では、「宅地因縁」という考え方が先祖供養の根底にあり、先祖や親類縁者に含まれる海難者を供養する一方で、さまざまな対象を「水難供養」の場において積極的に供養しようとしていることが事例から指摘できる。

霊友会系の教団は独自の先祖観や儀礼などの教義を持っており、その信仰形態も檀那寺や氏神（神社）といった既存の信仰と重複している。しかしながら、民俗事例としてそれらを扱った研究や報告はあまりみられない。

本稿では当該地域における海難者供養の習俗について触れながら、立正佼成会銚子教会と鹿島教会波崎南支部で行われている「水難供養」の事例を取り上げ、その供養の対象や背景について考察を行いたい。

The Custom of Remembering Maritime Accident Victims in the Tonegawa River Mouth Area

——A Case Study of Rissho Kosei-kai in Choshi City, Chiba Prefecture, and
Hasakimachi in Kamisu City, Ibaraki Prefecture——

Abstract: Rissho Kosei-kai is a new religious movement founded in Japan in 1938 by Nikkyo Ni-

wano and Myoko Naganuma, both of whom separated from the Buddhist sect Reiyukai. According to the FY2018 Religious Yearbook published by the Agency for Cultural Affairs, the organization has some 2.6 million members and 605 churches and missionary offices around the country. Among the new religious movements, Rissho Kosei-kai officially ranks third in membership after Happy Science and Soka Gakkai, and is the largest Reiyukai-affiliated sect.

The organization's churches and dojos (training halls) in Choshi City, Chiba Prefecture, and the town on the opposite bank of the Tonegawa River, Hasaki (former Hasaki-cho) in Kamisu City, Ibaraki Prefecture, hold monthly memorial rituals for people who died in water accidents. This area, located at the mouth of the Tonegawa River, is a famous fishing spot with the nation's highest annual landings. It saw significant development as an important eastbound marine traffic center during the latter part of the Edo period. On the other hand, the coast of Choshi facing the sea of Kashimanada is an infamous stretch of water prone to fatal accidents, and has long been feared as one of Japan's three most dangerous waters, which, besides Kawaguchi of Choshi, include Naruto Strait in Awa province and the Strait of Irago-doai.

While the area prospered thanks to the shipping and fishing industries, its history has been inextricably linked to tragic maritime disasters. As such, various folk customs are practiced to commemorate those who lost their lives at sea. These customs are influenced by a number of factors related to the area's seaside location, such as the history of maritime accidents typical of river ports and the geographic characteristics marked by a large fishing industry population.

At memorial services for water accident victims, Rissho kosei-kai members honor their own ancestors or relatives who died at sea, based on the idea of *takuchi innen* (land connection from the past) underlying the group's ancestral commemoration philosophy, but our study found that they readily commemorate shipwreck victims who are not their kin as well.

Religious groups affiliated to Reiyukai have their own distinctive views on ancestor worship and ritual teachings, while their religious practices incorporate traditional elements, such as faith in family temples or local Shinto deities. However, there are few studies or reports covering these topics as an example of folk tradition. Referring to the commemoration rituals for maritime accident victims practiced in the Tonegawa River mouth area, this paper will focus on the memorial rituals for water-related deaths performed by Rissho kosei-kai's church in Choshi and the Hasaki South branch of the Kashima Church to examine for whom the rituals are performed and why.

はじめに

利根川は新潟県と群馬県の県境に位置する大水上山（標高 1,831 メートル）より水源を発し、その河川延長は 322 キロメートルに及び、流域面積は 1 万 6,840 平方キロメートルと日本最大を誇る関東平野の代表的な一級河川として知られる。⁽¹⁾

利根川流域の舟運を研究した北見俊夫は、川を介した人生儀礼、年中行事、民俗芸能などの民俗事例から、河川は交通交易や漁撈の場だけではなく、人々の心意を反映させる場であると述べている（北見 1981）。

その利根川の河口域に位置する千葉県銚子市は、国内随一の年間水揚量を誇る漁業基地として知られる。その対岸に位置する茨城県神栖市波崎（旧波崎町）も、北部太平洋沿岸の巻き網船団を擁する有数の漁港である。いずれも河川港として、江戸後期には東廻り海運の要衝として廻船業や醸造業な

どで栄えた。しかし、一方で鹿島灘に面した銚子沖は海難の難所としても知られ、「阿波の鳴門か銚子の川口、伊良湖の渡合が恐ろしや」という俚諺が伝わり、日本三大海難所の一つとして恐れられた。このように、古くから海運業や漁業で繁栄した利根川河口域周辺は、悲惨な海難事故との表裏一体の歴史に翻弄されてきた。

本稿では当該地域における海難者供養の民俗事例について触れながら、立正佼成会銚子教会と鹿島教会波崎南支部で行われている「水難供養」の事例について取り上げ、その背景と供養の対象について考察したい。

I 先行研究と問題の所在

(1) 河川という民俗空間

北見俊夫は『川の文化』の中で、「川を利用できるほどの距離にある村なら、ほとんど例外なく川を使う。清浄なものを導くとともに、不浄廃棄の場とすることは、一見矛盾するようであるが、つきつめてみれば同じ心情に帰一するものであろう」と述べ、「川に抱く憧憬と畏怖の二面性は、川を通路とする聖と穢との両義性にも反映している」(北見 2013 (1981): 23-24) と指摘し、河川という空間の民俗性について言及している。特に河口域は海からの人や物が流入する集積地であり、下流から上流へと遡上した文化の伝播もみられる。とりわけ、銚子は鹿島灘に面した河川港であり、東廻り航路や紀州漁民の来住などによってさまざまな文化が移入されてきた地域であるといえる。

また、利根川の上流域(内水面)での虫送り、精霊流し、流れ灌頂⁽²⁾といった民俗事例は、海辺に面した河口域にも分布しており、北見のいう「川を通路とする聖と穢との両義性」は、河川を通じ内水面と海水面(河口域)の双方にみられる。そして「憧憬と畏怖」といった二面性は、舟運や漁業などの生産生業の場として繁栄をもたらす一方で、悲惨な海難に見舞われてきた河川港としての歴史的な特異性からも感じることができる。

(2) 先行研究と問題の所在——海難者とは何か

海難者(水死者)を供養すると、豊漁に恵まれるという伝承は漁村に広く分布している。海村を対象とした総合的な民俗調査としては学史上、「離島及び沿海諸村に於ける郷党生活の研究(いわゆる海村調査)」が初発として挙げられる。

その調査に用いられた「採集手帳」(沿海地方用: 100 項目)には、水死体の揚収作法や海難救助にまつわる二つの項目がみられる。

「30. 津波、難破、火災その他の災難に、郷黨はどんな風に援助しますか。異常時に於ける相互援助の種類や方法。」

「81. 流れ佛はどの様に取り扱ひましたか。屍體を舟へ乗せる時のしきたりや、濱へ漂着した場合の始末。流れ佛を祀つた例があるか。人骨が漂着した場合はどうするか。」

この調査は柳田国男の主導のもと郷土生活研究所同人が、昭和 12 (1937) 年 5 月から同 14 (1939) 年 4 月にかけて全国 30 か所の漁村で行っている。その成果報告書である『海村生活の研究』には、葬制の項に「流れ仏」の事例が挙げられている。

たとえば、「流れ仏を拾って来ると漁に縁喜がよいといふところは多く（岩手吉浜、同重茂、宮城大島、伊豆三宅島、和歌山太地、三重須賀利、高知鶴来島）島根県都萬村ではシビトを上げると漁ツキがすると言っている。」（柳田 1949：270）とあり、全国的に流れ仏を揚収することが、漁の際に縁起が良いとされている。また、共同慣行（9）「海上遭難救助」の項には、「宮城・大島の階上では遭難船のある場合には、ホトケをすっかり納めるまでは舟止めをして漁に出ず、浦中の者が寄ってホトケを上げる。これが不文の憲法である。」や、「千葉・千倉では海の災難には、組合から五圓十圓出し、村人は顔を出したりムスビを持って見舞いに行く。」（柳田 1949：60）といった報告がなされており、全国的に集落単位で海難の際には救難や遺体揚収を行っていたことが分かる。

海村調査者の採訪者であった牧田茂（1977）や桜田勝徳（1980）をはじめ、亀山慶一（1986）などの論考が先行研究として挙げられ、漁撈習俗の一端として水死体の揚収作法や問答の仕方、男女差などの事例をもとに考察が加えられてきた。

海難者が儀礼的に祀られる構造について言及した波平恵美子は、長崎県壱岐島の事例から水死体をエビスと呼ぶ習俗は、エビス神が元来持っている「境界性」と「両義性」に由来しており、水死体はその不浄性と危険性ゆえに神聖視され、「ケガレ」が豊漁をもたらす「ハレ」として儀礼的に転換したと述べている（波平 1978）。

また、波平は異常死の形態について、「死の原因」「死者の状況」「死の発生時期」という観点から、10 分類を提示した上で、溺死は事故死の一部であるが、さまざまな民俗事例から「溺死は事故死の中でもまた特別なものとして認識されていたことがわかるので、別立てにする方が良いと考える」（波平 1988:142）と説明している。ここでの「異常死」とは、あくまで民俗事例が報告された土地の人々が異常とみなす死のことであるが、波平が指摘するように、海難者にまつわる特異な民俗事例は広く分布している。

たとえば、浅野久枝は、三宅島で春の彼岸の中日に行われる海難者供養の事例を取り上げ、「無縁」と「ムエン」を区別しながら、三宅島でいう「ムエン」とは海で死亡した水死者のことを指し、陸上での異常死の場合には「ムエン」とはならず、たとえ身内でも水死者のみが「ムエン」という存在になると述べている（浅野 1981）。また、ムエンの墓を立正佼成会の会員が清掃していると報告している。

三宅島の「立正佼成会千代田中央教会三宅島道場」では毎年5月28日に、阿古地区の夕景浜にある「三宅島海難殉難者慰霊碑」において海難供養を行っている。現在は会員数が減少し高齢化も進んでいるが、毎月28日に慰霊碑周辺の清掃を行っているという。しかしながら、新宗教が海難者供養を行っている事例について、民俗事例として扱った報告は少ない⁽³⁾。本稿では、千葉県銚子と茨城県神栖市波崎の立正佼成会における「水難供養」の事例を取り上げたい。

II 利根川河口域の海難史

(1) 調査地の概要

千葉県北東部の銚子市（以下、銚子）は、利根川の河口に位置しており太平洋側は鹿島灘に面している。江戸時代には東廻り航路と利根川水運が開発されたことによって流通業を中心に交易都市として栄えた。また、全国的に知られたヤマサ醤油やヒゲタ醤油などの醸造業があり、特定第3漁港に指定されている銚子港は、太平洋沿岸の巻き網船団を擁する漁場基地として発展してきた。

その対岸に位置する茨城県東端の神栖市波崎町（以下、波崎）は、南西部が利根川に、北東部が鹿島灘に面した細長い町域を有する。また、水産業が盛んでイワシの漁獲量は銚子に次ぐ全国2位を誇る⁽⁴⁾。昔から生活圏内として対岸の銚子との繋がりが非常に強かったが、平成17（2005）年に神栖町に編入（神栖市施行）された。鹿島臨海工業地帯に位置しており、近年は銚子からの転入者も増加しているという。

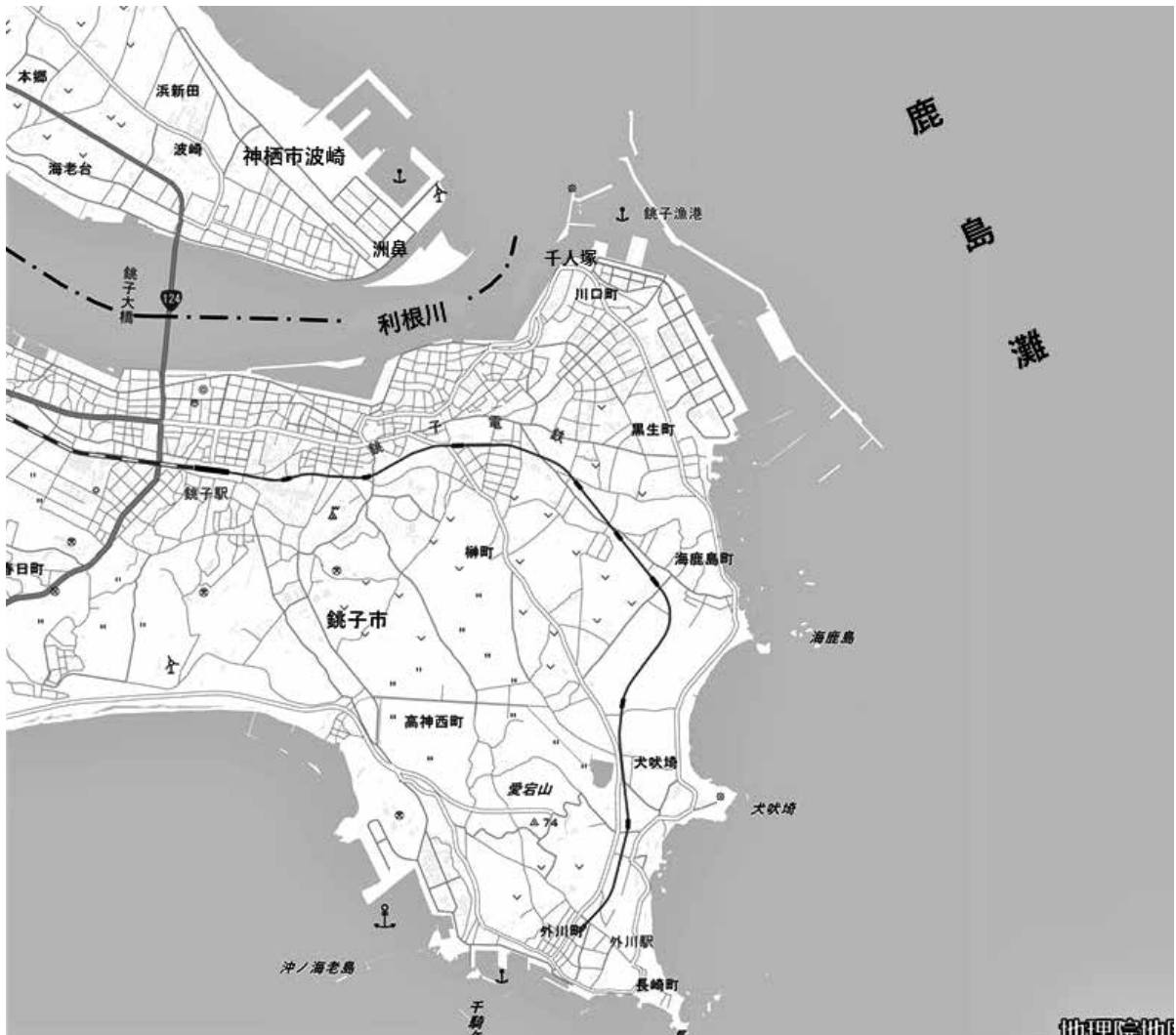


図1 利根川河口域（「地理院地図」を基に作成）

(2) 銚子の海難史

利根川は幾度もの河川改修を経て、寛永年間（1624-1643）に、現在の流路に整えられ、銚子から江戸を結ぶ利根水運が開かれた。

寛文 11（1671）年に河村瑞賢によって東廻り航路が開拓されると、銚子は奥州の天領から御城米を輸送する廻船の寄港地の一つとして、東廻り廻船の重要拠点として位置づけられ、務場（役人出張所）が設置される。奥州方面から銚子を経由する廻船には、房総半島外洋を廻って江戸や浦賀、神奈川湊を目指す「大廻し」と、銚子で荷揚げし川船に積み替えて利根川舟運によって江戸に運ぶ「小廻し」の二つの航路があった（斎藤 2003）。

いずれの航路も一端は銚子を中継地点としているが、『日本汐路之記』には、「犬棒の鼻より、川口迄磯多し、川口に加嶋瀬、丸瀬、明神瀬あり」と記されており、利根川河口付近には暗礁や暗洲が非常に多く、「阿波の鳴門か銚子の川口、伊良湖の渡合が恐ろしや」といわれ、日本三大海難所の一つとして恐れられていたという。

また、「銚子の川口でんでんしのぎ」といって、河口を航行する際は、自分の船を操るのが精一杯で、他の船に構う余裕すらないという意味の俚言が伝わる。

『千人塚周辺記』所収の「年代別海難発生記録表」（表 1）によると、慶長 19（1614）年から平成 2（1990）年の 376 年間で 169 件の海難があり、死亡者は 3,495 名を数えている（鈴木 1994）。

しかし、これはあくまで文献資料を基に集計した記述であり、実際に記録には残らない数多くの海難事故と、その犠牲者が存在したことが推察される。

表 1 海難総数表

年 代	発生件数	遭難船数	死亡又は行方不明
江戸時代 慶長 19 年～慶應 4 年	51	194	2,381 (3)
明治時代 明治元年～明治 43 年	30	83	675 (3)
大正時代 大正 7 年～大正 15 年	6	6	63 (3)
昭和初期 昭和 2 年～昭和 20 年	16	21	101 (3)
昭和後期 昭和 21 年～平成 2 年	66	66	275 (6)
合 計	169	370	3,495 (16)

* 鈴木正次『千人塚周辺記』（銚子市郷土史談会、1994）より転載

『銚子港沿革調』によると、「正保年中（1644-47）より銚子廻米次第に多く、承応年中荒野町に陣屋を置」とあり、仙台藩の陣屋が置かれている。このように、仙台藩領からの廻船が多く、銚子では廻船問屋を「気仙問屋」と呼んだという（川名 2007）。

安政 2（1855）年に赤松宗旦が版行した『利根川図志』には、「また獵船の風あくして歸りおそき時は、此塚のうへにて火を焚き川口の日印とする由にて、頂に火を焚きし跡あり。此塚の側に鐵炮の墓場あり。世人川口の御墓場と云ふ。」とあり、川口に位置する千人塚で狼煙を焚いたとある。また、近くの「幡ノ台」という丘陵の上から「汐時袋」という吹流しを揚げて、往来する船に潮時を伝達したという。この「汐時袋」に係る費用も仙台藩が負担していた（川名 2007）。

近世期には海難を防ぐためにさまざまな施策がなされてきたが、近代の海難事故として、明治 43

(1910) 年 3 月 12 日 (旧暦 2 月 2 日) に発生した「二月遭難」が、今も哀話として語られている。

その日は穏やかな日和であったが、鹿島灘沿岸を襲った暴風雪によって、銚子だけでも 109 隻の漁船が遭難し、死者 912 名・行方不明者 1,054 名を数える未曾有の海難が発生した (川名 2007)。

この時、外川では浜辺に数多の死骸が流れ寄ったので、市内高神東町にある高福寺 (真言宗) まで運んで、身元が分からないものは無縁仏として埋葬したという⁽⁵⁾。一方、波崎では手子后神社の祭礼日で神事を行っていて、出漁しなかったために難を免れたという伝承があり、今も祭日は休漁日となっている⁽⁶⁾。

このように悲惨な海難が後を絶たなかったが、昭和 46 (1971) 年の銚子漁港整備計画によって、利根川沿いに運河方式の導流堤による新航路を築いたことで、河口近くでの漁船事故は減少している⁽⁷⁾。しかし、それでも悲惨な海難事故は少なからず毎年のように発生している。

(3) 千人塚と海難伝承

利根川の河口域を見下ろす市内川口町の一角に「千人塚」と呼ばれる高台がある (図 2)。

その由来について『千人塚の慰霊塔』によると、「今を去る三百三十五年の昔、即ち慶長十九年十一月銚子港に大津波襲来し、折柄対岸鹿島灘に出船中の海舟は風浪のために海中に翻弄され、溺死した者千名以上に及んだという悲惨事を惹起した。この溺死者を埋葬したのが即ちこの千人塚である」(銚子港海難漁民慰霊塔建設期成会 1960: 2) とある。



図 2 銚子市川口町の千人塚 (2018.11.17)

これによると、慶長 19 (1614) 年に鹿島灘一帯を襲った大津波によって溺死した千人以上の遺骸を埋葬した場所と伝わり、現在判読できるだけでも享保 10 (1725) 年から平成 9 (1997) 年に建立された 50 基ほどの供養塔が立ち並んでいる⁽⁸⁾。

実際に河口に位置している千人塚は、昔から水死体が流れ寄る場所であったという。たとえば、川口で生まれ育った K さん (昭和 8 年生まれ) によれば、「昔は大きな海難事故があって行方不明になると、その家族や親戚はじめ、近所も義理で、みんなで浜に出て探した。水死体が揚がると怖いもの見たさに行ったけども、子どもながらに怖かった」という。同じく川口生まれの I さん (昭和 14 年生まれ) によれば、「昔は大きな山で、昭和 46 (1971) 年の護岸工事の際には、大量の遺骨が出てきた。それを近所中総出でトロ箱に並べてきれいに洗って焼き場で茶毘にして、また千人塚に埋めた」という。このように、古くから海難者の埋葬場所であったことがうかがえる。

前述の『利根川図志』には、「川口に有り。むかし獵師の海中に溺死したるを葬りし塚也と云ふ。石像の地藏尊建てり。毎年銚子中の寺々、其日／＼の定めありて、此塚の上にて施餓鬼あり。何人の詠みしにや、うたかたのきえしあはれはむかしにて今に泪のつゆふる塚」とあり、銚子近在の寺院では、古くから溺死者の施餓鬼供養を行っていたことがうかがえる。たとえば、文化 13 (1816) 年 2 月には、千人塚において浄土宗の名僧徳本上人が海難供養を行っている。

「廿九日、正六ッ半時千人塚にて名号塔開眼並溺死人回向。昨日御染筆の小石名号石は御回向後、海中へ松下五兵衛方の八手船を以て、川口へ投之、松下直吉、田中玄蕃手代新兵衛乗船。凡御回向一時余にて御帰寺。但今暁千人塚御回向に付、御上堂兩度也。」

(銚子市史編纂委員会編 1956：261-262)

以上、引用によると徳本上人一行は朝方、千人塚で名号塔を開眼した後、溺死者の供養を行っている。その前日には、阿弥陀名号を書写した小石を、八手網に用いる船に乗って河口で海中に投げ入れたことが分かる。⁽⁹⁾

徳本上人を請待した 10 代目田中玄蕃（ヒゲタ醤油創業家）は、『玄蕃日記』⁽¹⁰⁾を著した教養人で、文化 12（1815）年 8 月に大字名号を授与されている（石川 2016）。

また、『玄蕃日記』によると、同年 7 月には「浜方不漁に付、飯沼浦商人志願にて千人塚浦に於いて、浦祈祷水施餓鬼」とあり、飯沼山円福寺（真言宗）から僧侶が出向いたことが記してある（松尾 2002：35）。

このように古くから千人塚では溺死者の供養に際し、地方の有力な商人や船主等が海難者の供養に関わっていたことがうかがえる。現在も市内妙見町の妙福寺（日蓮宗）では毎年 4 月 16 日に、川施餓鬼を行っており（図 3）、市内春日町浄国寺（浄土宗）でも毎年 8 月 24 日に「川口千人塚施餓鬼会」を行っている。



図 3 妙福寺の川施餓鬼法要（2018.4.16）

（4）千人塚の海難漁民慰霊塔

銚子では、昭和 34（1959）年に各種漁業従事者組合を主体とする「銚子港海難漁民慰霊塔建設期成会」が結成された。翌 35（1960）年には「海難漁民慰霊塔」が建立され、後背地に水難救済所を整備している。

慰霊塔の海難者は、明治 17（1884）年から昭和 44（1969）年まで 1,039 名を数え、『千人塚の慰霊塔』に所収の海難漁民名簿（但し 909 名分）によれば、銚子市内と対岸の茨城県波崎町が非常に多く、北は青森県から南は高知県の漁民が含まれている（銚子港海難漁民慰霊塔建設期成会 1960：19-29）。その中でも千葉県内と茨城県、遺族不明者を除くと、特に岩手県や宮城県の水難漁民が多くみられる。

三陸地方では漁場の拡大と船体の大型化に伴って、39t・47t 型の近海マグロ延縄漁船が特に盛んだった昭和 30 年代に遭難事故が相次いで発生している（小松 1974）。



図 4 唐桑町漁船員の慰霊碑

たとえば、昭和 30（1955）年 12 月には、銚子沖を襲った低気圧による大時化によって、宮城県本吉郡唐桑町（現気仙沼市）の第 12 千代田丸・第 7 古峯丸・第 6 観音丸の 3 隻が遭難し、43 名が犠牲となっている。気仙沼地方の近海マグロ延縄漁船の船宿となっていた銚子市竹町の廻船問屋（船主代行業）では、翌 31（1956）年に私財を投じて、千人塚に「水難者之霊」と刻まれた慰霊碑（図 4）を建立している（唐桑町海の殉難者慰霊碑保存会 2006）。このように、他県船の犠牲者のために銚子の船問屋や漁業関係者等が、慰霊碑を建立している事例も複数みられる。現在も海難者の命日や年忌には遺族や船主等が供養に訪れており、出航前に拝みに訪れる船員の姿もみられるという⁽¹¹⁾。

Ⅲ 銚子における「水難供養」の事例

（1）立正佼成会と銚子教会の概要

立正佼成会（以下、佼成会）は、昭和 13（1938）年に霊友会から独立した庭野日敬（開祖）、長沼妙佼（脇祖）によって創設された新宗教である。『宗教年鑑』（平成 30 年度版）によると、現在の会員数は約 260 万人で、国内に 605 か所の教会や布教所がある⁽¹²⁾。新宗教では幸福の科学や創価学会に次ぐ信者数（公称）があり、霊友会から派生した中でも最大規模の教団である⁽¹³⁾。

銚子市周辺地域においては、昭和 25（1950）年頃から布教が始まり、昭和 29（1954）年に銚子連絡所が発足する。その後、昭和 44（1969）年に立正佼成会銚子教会（以下、銚子教会）が設立され、昭和 52（1977）年には会員数が 6,600 世帯に達し、新たに銚子教会道場が建設される（教団史編纂委員会 1984）。

現在、銚子教会は県北東部の銚子市・旭市・匝瑳市・東庄町の一部を教区として 11 支部で組織されており、会員数は約 5,000 世帯あるという⁽¹⁴⁾。銚子教会の特徴としては、水産業に従事している世帯が多くみられることから、毎月 24 日に市内川口町の千人塚と外川地区の海岸で「水難供養」が行われている。

その由来について、『立正佼成会史』第 4 巻によれば、昭和 33（1958）年頃、幹部らが海岸部を布教のために車で訪れていた際、千人塚の前で車が動かなくなったため、懸命に題目を唱えようと無事に車が走り出した。この出来事を後日、庭野日敬（開祖）に話したところ「南無妙法蓮華經 南無多宝如来 南無釈迦牟尼如来 水難横死の霊 追善供養也」（方 6 寸・長 13 尺・ヒノキ材）と記した開祖の親筆による海難供養塔が建立され、併せて施餓鬼供養が行われた。以来、銚子教会では毎月恒例の行事として「水難供養」が行われるようになったという（教団史編纂委員会 1984）。

また、毎年 8 月 16 日には海難犠牲者をはじめ、戦没者や先祖供養の灯籠流しが行われている。これは昭和 36（1961）年頃から始まった行事で、当初は銚子教会の行事だったものが地域に定着し、現在は銚子市内の 18 か寺が協賛して行われ、教会も準備などを行っている。毎年 11 月には教会内において「合同海難供養」が行われ、多くの会員が海難者供養に参列している。

現在、千葉県内の教区内においても「水難供養」は、銚子教会の特徴的な活動として周知されており、令和元（2019）年度の千葉県内 13 教会合同の青年部勉強会や、銚子教会青少年平和学習など各種研修として活用されている。

（２）千人塚における水難供養

千人塚では毎月 24 日に、教会内 7 支部（東庄・松岸・中央・双葉・観音・港・川口）が当番制で、「水難供養」を行っている。この内、港支部では毎月の奉仕活動として千人塚の周辺の清掃を行っている。法要が行われる 1 時間前には、会場のテントの設営などの準備が行われ、午前 10 時から担当支部の壮年部長を導師として参加者全員で読経が始まる（図 5）。ご宝前には、仏花・おにぎり・水・清酒・団子・菓子類などが供えられる。供物は全て近隣の商店から購入されるが、青果や菓子などを持ち寄る会員もみられる。15 年ほど前までは、髭題目が書写された料紙に供物の団子を包んで海へ流したという。



図 5 千人塚での水難供養（2017.10.4）

Ⅳ 外川における「水難供養」の事例

（１）外川の概要と徳本講

銚子半島先端に位置する銚子市外川町（以下、外川）は、古くからの街並みが残る外洋に面した漁師町で、明暦 2（1656）年に紀州広村（現和歌山県有田郡広川町）から来住した崎山治郎右衛門によってイワシ網の拠点として開発された⁽¹⁵⁾と伝わる。

また、治郎右衛門が海難に遭遇した際に、飯沼村（現銚子市飯沼）と高神村（同市高神）の人々に助けられたことから、寛永年中に 140 名もの紀州漁民や干鰯商人を呼び寄せて、任せ網などの漁業技術を伝播し、往時は外川千軒大繁盛といわれ栄えたという⁽¹⁶⁾。



図 6 大納屋阿姫供養碑（2018.11.18）

そのような昔からの漁師町である外川では、毎年旧暦 3 月 8 日（阿姫の命日）に、外川見晴台霊苑（外川サンメー）にある「徳本念佛塔」（大正 5 年再建）の前で、徳本講（トッコンサマ）が行われる。

外川を訪れた浄土宗の僧徳本上人が、憤死した阿姫の供養を行って荒海を静めたという伝承に由来しており、海難者の供養と海上安全を祈願する行事として行われている。

外川漁港（西ノ浦）には、「外川港大納屋阿姫供養塔」（図 6）が建っており、今も漁業関係者を中心に信仰されている。また、海難事故が発生した際にも個々に供養が行われている。

（２）外川支部の事例

外川では、昭和 52（1977）年に会員数の増加に伴って外川法座所が設置され、昭和 58（1983）年

に外川支部が発足する。毎月12日には外川の大杉神社の清掃と、22日には海岸で草刈りやゴミ拾い等の活動を行っている。外川も漁業を生業とする会員が多いことから、支部が発足した当初は千人塚での「水難供養」に参加していた。その後、外川漁港で発生した海難事故をきっかけとして、当時の教会長に要望して支部独自の水難供養が始まったという。

毎月24日（但し1月を除く）に外川漁港海岸沿いの砂浜（通称：三角プール）で行われる。浜には、「南無妙法蓮華經 奉回向盡十方法界諸精霊位」（平成20年建立）、「南無妙法蓮華經 水子諸々霊位」（平成23年建立）と書かれた、二つの供養塔が建立されている。また、詳しい由来までは分からないが、海難者の墓と伝わる自然石も傍らに祀られている。外川では支部壮年部長を導師として、毎月24日の午前10時頃から、ご宝前に仏花、おにぎり、水、清酒、菓子類などを供え、参列者全員で読経する（図7）。その後、波打ちぎわに線香を立て、供物を海に流して拝む（図8）。浜から見える位置には「長崎鼻」という岬があり、その周囲には「デバリノカド」という岩礁がある。ちょうど漁港から目と鼻の位置にあるのにもかかわらず、昔は目の前で海難事故が頻繁に発生した。



図7 外川での水難供養（2019.2.24）



図8 浜辺での供養（2018.12.24）

（3）水子供養としての水難供養

外川では「水難供養」の際、平成23（2011）年11月に建立された「水子諸々霊位」とある供養塔の前に、幼児向けの菓子や飲料などが供えられていた。この水子供養の由来については、水難供養に参加していた女性会員の一人が葡萄の房が沢山垂れ下がっている夢を見たため、当時の教会長に相談したところ、おそらく水子（ブドウゴ）であるからと、水子供養塔が建立されたことに始まる。

ブドウゴ（葡萄子）とは、一般的に胞状奇胎という妊娠異常によって流産した胎児のことを指す。外川では「葡萄の夢を見ると水子、またはブドウゴ」といった俗信があり、先述の夢が水子供養と結びついた要因の一つとなっている。また、外川には昔遊郭があり、身重になった遊女が腰まで海に浸かり、腹部を冷やして墮胎させたという話も伝わっている。明治43（1910）年の「二月遭難」の際には、浦々の漁師がほぼ全滅したため、零細漁民は娘を身売りしたという哀話が伝わっている。⁽¹⁸⁾

銚子には、江戸後期から大正初めまで松岸遊郭や本城遊郭といった花街があり、戦後も田中という赤線地帯があった。銚子市の円福寺（真言宗）の墓地には、大正13（1924）年に建立された「本銚子町料理店組合酌婦之墓」があり、夭折した10代から30代の女性38名の名前が刻まれている。利根川や犬吠埼ではさまざまな境遇から、身投げした遊女が浜に流れ寄ったといった話も伝わる。このような海や浜辺に依拠したさまざまな要因から遊女や妊産婦、水子についても水難供養の対象とされていることがうかがえる。

V 波崎における「水難供養」の事例

(1) 波崎南支部の事例

銚子教会では波崎町在住の会員も多かったことから、昭和 49（1974）年に波崎支部が増設され、昭和 60（1985）年には旧銚子道場を移築した波崎修養道場が設置された。その後、平成元（1989）年に鹿島教会区に編入されるまでは、銚子教会の一支部として存在していた。以前まで波崎支部は第 1 から第 3 支部の三つに分かれていたが、現在は波崎町の学区を基に、北支部と南支部の二つに分かれる。南支部は、7 地区（洲鼻・明神・本郷・荒波・舍利・仲新田・松下）に分かれ、各地区に主任がいる。毎月の奉仕活動として手子后神社の清掃や、隔月で平和観音での戦没者供養が行われている。

「水難供養」は毎月 26 日前後に波崎漁港近くの洲鼻地区に位置する「海難漁船員慰霊の塔」（昭和 60 年建立）の前で行われている。各地区の主任が持ち回りで供物などの準備を行う。毎月午前 10 時頃から、ご宝前には仏花、手作りの菓子や惣菜、おにぎり、水、清酒、果物などが供えられ、支部長を導師として参列者全員で読経を行う。その際、水難供養で回向する戒名用紙を参列者が分担して読み上げる（図 9）。戒名用紙には、供養の願い入れがあった昭和 50（1975）年 10 月から平成 30（2018）年 3 月（調査時）までの水難者の戒名が記されており、銚子教会時代から引き継がれて供養されている。

その中には、「□生院□□□徳二十名信士 □□丸の水死二十名」、「□生院□□□徳信士 □□□で釣りをしていて波にさらわれ死んだ男」、「□生院□□□徳信女 □□地区にまつわる遊女数十名」といった戒名が散見⁽¹⁹⁾できた。

慰霊塔前での供養が一頻り終わると、波崎漁港に移動し、団子などの供物を髭題目が書写された料紙に包んで海へと流す。これを波崎では、オナガシ（御流し）といい、以前は銚子教会でも行われていたという。雨天の場合にも欠かすことなく、必ず波崎道場や車内で水難供養を行うという（図 10）。

海難慰霊塔が建っている一角は、波崎漁港整備や宅地造成に伴って埋め立てられるまで周りは全て砂浜で、樽で 3 杯も 4 杯もハマグリが採れるような浜辺だったという。慰霊塔の周辺には判読できるもので、元禄 8（1695）年から昭和 55（1980）年建立まで 8 基ほどの供養塔があり、昭和 61（1986）年に建立された大亀大明神（カメノコサマ⁽²⁰⁾）の祠が隣接している。昔から利根川河口に位置する洲鼻には、さまざまなものが寄り集まる場所であったことがうかがえる。

波崎町洲鼻の N さん（昭和 13 年生まれ）によれば、「昔はちっと（少し）の時化でも生活のために海に出て、佐原だの潮来からもサッパ（川船）でイワシの煮汁を買いに来たり、死んで浜に流れて寄った人（水死体）は、波崎の人らが穴を掘ってノメ（埋め）た」という。洲鼻周辺は、対岸にある千人塚と向き合う位置にあることから、おそらく波崎において海難者を埋葬する場所であったと考えられる。



図9 波崎での水難供養 (2018.12.23)



図10 波崎漁港でのオナガシ (2018.12.23)

VI 「水難供養」の対象と背景

(1) 校成会の先祖観と水難供養

霊友会の供養法や儀礼を素地としている校成会では、先祖供養の方法として単身者の場合には父方と母方、既婚者の場合には夫方と妻方の双方の先祖を総じて、「総戒名」という独自の戒名を供養対象としている。校成会の場合には、「諦生院法道慈善施先祖⁽²¹⁾○○家徳起菩提心」という総戒名を用いる。

そして、校成会では個人にも既存の戒名とは別に「生」「院」「徳」の三字を入れた九字の戒名を、先祖をはじめ、自身との血縁や関係が密接な親類縁者に授けて供養する。

戒名を依頼する場合には、戒名用紙に氏名や命日、既存の戒名などを記入して、教師資格を有する戒名当番者が儀礼に則って戒名を授ける。これを霊鑑（過去帳）に記して、前述の総戒名とともに各家のご宝前に祀る。また、血縁者と親類縁者というように区別した霊鑑を、二つないしは複数祀る家もみられるという。供養を申し込む場合は「御供養御願」を提出し依頼する。とりわけ漁業従事者や水産関係者が多い銚子と波崎では、双方の先祖や親類縁者に海難者が含まれている場合が多い。

たとえば、銚子市明神町のIさん（昭和14年生まれ）によれば、同家では明治43（1910）年の「二月遭難」と戦時徴用船での海難者を供養している。同家は昭和11（1936）年に揚繰網漁業の経営を始めたが、戦時中に所有船の第1今清丸（25t）、第2今清丸（35t）、第3今清丸（37t）の3隻が徴用されている。第2今清丸・第3今清丸の2隻は乗組員の徴用船は無かったが、船が中国方面に派遣された。派遣途中に下関付近で、どちらか1隻は撃沈されているが、もう1隻は後に返還されている。第1今清丸は軍用の魚を獲るため、銚子沖での作業中に故障し漂流中、昭和20（1945）年1月17日に米軍機の機銃掃射を受け乗組員11名中10名が死亡している。そのうち1名だけ米軍の駆逐艦に救助され生存したが、戦後も当時の惨状について語ることはなかったという（銚子市 1983：500）。

昭和57（1982）年に同家では縁者一同で、千人塚に「今清丸慰霊塔」を建立している（図11）。同家の霊鑑には「今生院法清堅徳二十四名信士 今清丸乗組員24名」とあり、詳しい由来までは伝わっていないが「二月遭難」の海難者も含まれているという。

明治43（1910）年に発生した「二月遭難」の際には、多くの漂流遺体が浜辺に流れ寄ったと伝わり、外川や長崎の墓地には海難にまつわる無縁仏の墓碑が数多くみられる。銚子市外川のAさん（昭和

18 年生まれ) によれば、「母方の実家では、大正期から昭和 30 (1955) 年頃までイワシ揚繰網の網元をしており、船に乗っていた際に死亡したという漁夫を、長崎の共同墓地 (長崎サンメー) にある自家の墓の傍らに、無縁仏として祀っていた」という。

同墓地には判読できるものだけでも、明治期から大正期の海難者の墓碑が 3 基⁽²²⁾ほど確認できる (図 12)。漁業者の場合には海難事故に遭遇し、漂流遺体を揚収するようなことも多く、そのような地域性なども「水難供養」の背景として考えられる。



図 11 今清丸慰霊塔 (2017.10.24)



図 12 海難者の墓 (2019.2.24)

(2) 「宅地因縁」と水難供養の関係性

「水難供養」の事例では、先祖や親類縁者を供養する一方で、海辺にまつわる供養の願い入れがあったさまざまな対象を積極的に供養しようとしていることが分かる。

たとえば、水難供養に訪れている外川の Y さん (昭和 10 年生まれ) によれば、「おばあさん (姑) はとても苦労した人で、幼い頃に明治 43 (1910) 年の「二月遭難」で父親を亡くし、結婚後も三人目の子どもを身籠った矢先に、船員だった夫が宮城県石巻沖で遭難したという。このような境遇から、父親と夫の供養として水難供養を大切にしていた⁽²³⁾」という。また、自身が若い頃の体験として、外川の海岸で東京の若い男性が転落して溺死した際、ある老齢の女性会員から「お前んとこでは、船 (漁業) やってっから供養してやれ」と助言され、最近まで供養を行っていたという。

このような海辺に依拠した地域性を背景としながら、校成会の場合には「宅地因縁」という考え方が先祖供養の根底にある。校成会では、本尊を勧請している会員の各家庭に、世帯名を入れた「〇〇家宅地因縁精霊大悲生所善義起菩提心」と書かれた「宅地因縁総戒名」が祀られる。「宅地因縁」の考え方としては、先祖も地域 (宅地) と密接に結びついており、数えきれないほど多くの先祖の因縁の総和が、その土地の因縁に近い存在として捉えられている。

その具体的な事例として、『立正校成会史』第 1 巻では、以下のように述べられている。

「各地の教会で、その包括教区内に古戦場があれば、両軍の戦死者の慰霊祭を行ない、飢餓や百姓一揆、地震や洪水などについても、こまかな史実を調べた上で最もふさわしい日を選んで犠牲者の霊を慰撫する。また土地の伝承の中にあらわれ、今も庶民信仰の対象になっている祟り神などの祭りも丁重にとり行なうといった行為が頻繁に見られる (以下省略)」(教団史編纂委員会 1983 : 558-559)。

このように土地にまつわる史実や伝承、庶民信仰を背景として、地域における供養の対象が選ばれ、

各地域でそれぞれ展開していった経緯がうかがえる。

銚子や波崎の場合には、過去から現在までの悲惨な海難に翻弄されてきた歴史的な背景や地域性が、土地の因縁として考えられ、海辺に依拠する身投げした遊女、墮胎された夭折児、漂流遺体といった個々の存在が、「宅地因縁」として結びつき、その供養の行法として「水難供養」が位置づけられたと考えられる。



図 13 外川に流れ寄った位牌 (2018.11.17)

たとえば、平成 23 (2011) 年に発生した東日本大震災の際には、銚子や波崎にも津波が押し寄せている。外川では水難供養塔の前に住宅建材と位牌が流れ寄ったという。現在も位牌は供養塔の傍らに祀られ、建材は加工されベンチとして再利用されている。一度、震災後に台風による大時化で位牌が流されたことがあったが、不思議にも後日、同じ場所に戻っていたという。

銚子市では最大 3.9 メートルの津波を観測しており、市域の 3.6 パーセントにあたる 2,997 平方キロメートルが浸水被害を受けているが、人的な被害はなかつた⁽²⁴⁾。この出来事についても、話者の多くが聞き書きの中で、「水難供養しているお陰で、銚子は津波の被害が少なかった」などと語り、「水難供養が始まってから、大きな海難事故が少なくなった」と話していた。

(3) 漁撈習俗としての水難供養

「水難供養」にまつわる霊験譚や、その功德によって、津波や海難から免れたという語りは、悲惨な海難事故や災禍を回避しようとする海辺に暮らす人々の心意が根源にあると推察できる。

たとえば、聞き書きの際にも「銚子は漁師町だから神様仏様は何でも信じる土地柄である」と、何気ない会話の中で漁撈との関係がつぶさに語られ、外川や波崎でも同様の話を開くことができた。

それを如実に物語る事例として、昭和 43 (1968) 年頃に銚子の浜沿いの地域の支部長をしていた女性は、当時の布教の様子について、以下のような回想をしている。

「布教は根気強く。月十六回開く現地法座に四、五十名あり、半数近くが未会員で入会者が一、二名あります。が、問題は入会した後の手取り。「お参り信仰」の強い漁師の奥さんたちは、夫の出漁前とか出漁中は、黙っていても道場にやってきます。そして、法座の話には耳をかさず一心にお祈りしています。祈祷信仰では救われない、と目覚めさせるためには一年かかります。そこまで手取りが大変なんです、でも、ひとたび納得すると、今度はどんな障害にもくじけない逞しい浜ッ子根性を発揮して、どんどん布教活動にとびこんでいきます。」(教団史編纂委員会 1984: 457-458)。

ここで注目したいのは、「法座」の場に参加している半数以上は非会員の女性で、皆漁師の夫を持つ主婦たちである。そして積極的に夫の出漁前や出漁中に参加しており、「法座の話には耳をかさず一心にお祈りしています」とある。「法座」とは本来、日常生活や信仰上の悩みなど会員間で相談し合う場であり、「手取り」とは、他の信者宅を訪問して関係を深めて布教することを意味する。

しかし、ここで回想されているように、主婦たちは自身の生業にまつわる大漁祈願や航海の安全と

いった個々の祈願に訪れていたことが分かる。その後、昭和52(1977)年には銚子教会の会員数は6,600世帯に達しており、沿岸部での布教は、次第に受け入れられていったことを物語っている。しかしながら、当初はあくまで漁撈信仰の一つとして「法座」の場が受容されていたことが、回想からうかがえる。「水難供養」についても海難者の追善供養といった側面だけに限らず、漁撈信仰の一端として捉えることもできるのではないと思われる。

おわりに

以上のように、千葉県銚子市と茨城県神栖市波崎町における佼成会の「水難供養」の事例について触れてきたが、その背景には、悲惨な海難に翻弄されてきた利根川河口域の歴史や漁業従事者が多い地域性などが深く関係している。

佼成会では法華経を所依としながらも、「総戒名」のように独自の先祖観や供養法などの教義を持っており、既存の檀那寺や地域の氏神（神社）との関係性も重視している。その信仰形態は排他的ではなく、むしろ民俗事例とも重層的なつながりを持っており、毎月の水難供養や夏祭りの灯籠流しは、地域にも周知されており受容されている。水難供養の事例では、海辺に依拠した水難者等の無縁仏をはじめ遊女や妊産婦、水子も含め供養の対象となっている。その背景には、佼成会における先祖観や「宅地因縁」という考え方が深く関わっており、先祖や親類縁者に含まれる海難者を供養する一方で、海辺にまつわるさまざまな対象を積極的に供養しようとしていることが事例から指摘できる。

本稿ではあまり言及できなかったが、海辺の人々の意識として「水難供養」は、漁撈信仰の延長線上に位置づけられていたと推測できる。今後、海難にまつわる個別の事例から「水難供養」が、どのように受容されていったのか明らかにしながら、既存の民俗事例や漁撈習俗との関連や影響などについても課題としたい。

註

- (1) 国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所を参考：<http://www.ktr.mlit.go.jp>(2019.7.31)。
- (2) 流れ灌頂とは、産死者や水死者をはじめ不慮の死、変死を遂げた者の供養のために行われる水辺での儀礼のことを指す。川の辺に経文を書いた布を張り、道行く人に柄杓で水を掛けてもらおうと、死者が成仏するという（福田アジオ他 2000：246）。
- (3) たとえば、川島秀一は宮城県気仙沼市小々汐集落の事例として、1990年代まで「解脱会」のカミサマ（晴眼の巫女）が、水死者と魚貝類を供養する放生会を報告している（川島 2013：241）。また、平成23(2011)年の東日本大震災の前まで「佛所護念会教団」が、気仙沼みなと祭りで行われる灯籠流しに参加していた。
- (4) はさき漁業協同組合広報による。
- (5) 銚子市外川の山崎みちよさん（昭和10年生まれ）から聞き書き。
- (6) 神栖市波崎の奈良静子さん（昭和13年生まれ）から聞き書き。
- (7) たとえば、2019年5月29日未明には犬吠崎沖で貨物船同士が衝突し、愛媛県今治市の千勝丸(499t)が沈没している。
- (8) 筆者の調査による。
- (9) 水難供養や魚鱗供養として一字一石経を海中に投じる「石経」という習俗は、熊野灘沿岸に分布している。徳本上人の水難供養の伝承も紀伊半島に分布しており、紀州からの伝播もうかがえる。銚子の事例では弥陀名

号を書写した多字一石を投石している。

- (10) 『玄蕃日記』は、銚子市指定有形文化に登録されているヒゲタ醤油の創業家の田中家 10 代目田中玄蕃から始まる日記である。文化 9(1812)年から明治 5(1872)年に至る 61 年間にわたり、その総数は 95 冊に達している。
- (11) 銚子市川口町の鈴木久予さん(昭和 13 年生まれ)より聞き書き。
- (12) 文化庁『宗教年鑑』(文化庁 2018)。但し、立正佼成会の教団概要によれば、約 141 万世帯、国内 238 教会(2018 年 1 月現在)とある。
- (13) 『宗教年鑑平成 30 年度版』(文化庁 2018)を基にしている。
- (14) 立正佼成会銚子教会にて聞き書き(2019.7.23 調査)。
- (15) 「窓外に黒潮を見下ろす銚子外川のまち」を考える会『窓外に黒潮を見下ろす銚子外川のまち』(同会 2017:3)。
- (16) 佼成会外川法座所にて聞き書き(2019.2.24 調査)。1 月は水難供養に限らず、他の仏事なども大晦日から小正月(15 日)まで忌んでいる。
- (17) 佼成会外川法座所にて聞き書き(2019.2.24 調査)。1 月は水難供養に限らず、他の仏事なども大晦日から小正月(15 日)まで忌んでいる。
- (18) 茨城県神栖市波崎町での聞き書き(2018.12.23 調査)。『飯岡地区下永井の民俗:千葉県旭市:東京学芸大学民俗調査ゼミナール調査報告』東京学芸大学橋村研究室(同研究室 2015:18)なども参考。
- (19) 戒名については、故人の俗名等も含まれる場合もあるため、□で表記した。
- (20) 利根川河口域におけるウミガメの埋葬習俗については、小島孝夫「漁業の近代化と漁撈儀礼の変容:千葉県銚子市川口神社ウミガメ埋葬習俗を事例に」『日本常民文化紀要』(成城大学大学院文学研究科 2003)に詳しい。
- (21) 立正佼成会『儀礼儀式全集』(二)(立正佼成会教務局 2009)を参考。また、総戒名は霊友会の場合には「誠生院」から始まり、左側が夫方、右側が妻方となっているが、佼成会では「諦生院」から始まり右側が夫方、左側が妻方となっている。
- (22) 長崎共同墓地(2019.1.24 調査)による。
- (23) 話者のケースでは 50 年を過ぎたので弔い上げをしたが、本来佼成会では年忌に限らず供養する。
- (24) 「平成 23 年東北地方太平洋沖地震銚子市被害記録」(銚子市役所総務部地域協働課 2012)を参考。

参考文献

- 赤松宗旦著／柳田国男校訂 1938『利根川図志』岩波文庫
- 浅野久枝 1981「「ムエン」考:三宅島阿古の事例」『民俗学評論』大塚民俗学会
- 石川達也 2016「千葉県における徳本行者の巡化とその影響」『平成 28 年度浄土宗総合学術大会研究紀要 佛教論叢』第 61 号 浄土宗
- 小野寺佑紀 2017「海難者を祀る習俗:気仙沼地方の事例を中心に」『東北民俗』51 輯 東北民俗の会
- 小野寺佑紀 2019「銚子市沿岸における海難者供養:立正佼成会の「水難供養」を事例に」『東北民俗』53 輯 東北民俗の会
- 片山正和 1978『イワシのうた』崙書房
- 亀山慶一 1986「流れ仏考」『漁民文化の民俗研究』弘文堂
- 川島秀一 2013「魚と海難者を祀ること」『歴史民俗資料学研究』第 18 号 神奈川大学歴史民俗資料学研究科
- 川名登 2007『ものと人間の文化史 139:河岸』法政大学出版局
- 唐桑町海の殉難者慰霊碑保存会編 2006『涛哭の海:創立 40 周年記念誌』唐桑町海の殉難者慰霊碑保存会
- 教団史編纂委員会 1983『立正佼成会史』第 1 巻 非売品
- 教団史編纂委員会 1984『立正佼成会史』第 4 巻 非売品
- 北見俊夫 1981『川の文化』日本書籍

小松宗夫 1974『海鳴りの記：三陸漁業のあゆみ』宮城県北部鯉鮪漁業協同組合

銚子港海難漁民慰霊塔建設期成会 1960『千人塚の慰霊塔 この悲しみを繰返えすことなく』銚子港海難漁民慰霊塔建設期成会

銚子市 1983『続銚子市史』Ⅰ昭和前期 銚子市

銚子市史編纂委員会編 1956『銚子市史』銚子市史編纂委員会

銚子市役所総務部地域協働課 2012「平成 23 年東北地方太平洋沖地震銚子市被害記録集」銚子市

東京学芸大学橋村研究室 2015『飯岡地区下永井の民俗：千葉県旭市：東京学芸大学民俗調査ゼミナール 2010 年・2011 年度調査報告書』東京学芸大学橋村研究室

波崎町史刊行専門委員 1991『波崎町史』波崎町

福田アジオ 新谷尚紀 湯川洋司 神田より子 中込睦子 渡邊欣雄 2000『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館

波平恵美子 1988「異常死者の葬法と習俗」『仏教民俗学大系』4 祖先祭祀と葬墓 名著出版

波平恵美子 1978「水死体をエビス神として祀る信仰：その意味と解釈」『民族学研究』42 巻 4 号 日本民族学会

文化庁 2018『宗教年鑑 平成 30 年度版』文化庁

牧田茂 1977「死者との問答」『海の民俗学』岩崎美術社

「窓外に黒潮を見下ろす銚子外川のまち」を考える会 2017『窓外に黒潮を見下ろす銚子外川のまち』『窓外に黒潮を見下ろす銚子外川のまち』を考える会

松尾須美礼 2002「銚子市川口神社を巡る神事の変遷と信仰圏の形成」『歴史地理学調査報告』第 10 号 筑波大学歴史・人類学系歴史地理学研究室

立正佼成会教務局 2009『儀礼儀式全集』（二）立正佼成会

立正佼成会銚子教会 2018「千人塚慰霊供養にあたり」立正佼成会銚子教会

立正佼成会銚子教会 1982『立正佼成会・銚子教会 25 周年記念誌：輝心』非売品

立正佼成会銚子教会 1997『立正佼成会銚子教会発足 40 周年記念誌：銚翔』非売品

立正佼成会銚子教会 2007『立正佼成会銚子教会発足 50 周年記念誌』非売品

斎藤善之 2003「近世における東廻り航路と銚子港町の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 103 集 国立歴史民俗博物館

桜田勝徳 1980「漁村におけるエビス神の神体」『桜田勝徳著作集 1：漁村民俗誌』名著出版

鈴木正次 1994『千人塚周辺記』私家版

柳田国男編 1949『海村生活の研究』国書刊行会

【謝辞】 調査にあたっては、立正佼成会銚子教会の小野恭代教会長（調査時）はじめ、各支部長、会員の皆様方にご教示いただきました。また、鹿島教会波崎南支部の塚田貴世氏、開祖顕彰資料室の會澤健裕氏にお世話になりました。附して深く感謝申し上げます。